序

筑波技術大学保健科学部
形井秀一

未曾有の大震災、大人災が東日本を襲った。その衝撃は余りに大きい。阪神淡路大震災の時にも書いた（『からだの声を聴く』）ように、地球上に棲息する人間という動物は、すべてを自分たちの思い通りにできると思っていたが、自然の前には力及ばない部分も大だということを思い知らされた大惨事である。しかし、もちろん、ここにとどまるわけにはいかない。誰もがそう思っている。復興に向けて頑張りたい。

さて、『社会鍼灸学研究 2010』をお届けする。本年度のテーマは「日本鍼灸の存在意義を探る～いま、改めて日本鍼灸を問う～」であった。今、世界で、鍼灸なかんずく東洋医学の標準化がすすめられており、世界の医療における位置づけを明確にするという意味で、重要な局面を迎えているが、同時に、どのような鍼灸、すなわちどの国で行われている鍼灸の何を標準的なものとするかも重要な問題となってきた。それは、学術的な側面以上に、自国の医療や医学としての価値を明確にし、その使用に当たっては経済的な見返りを要求するということまでも視野に入れて標準化が考えられているからである。

資本主義経済体制下おいては、すべての「ものやこと」が、つまり「人間」も含めてすべてが経済的価値で計られ、貨幣価値に置き換えられる。そのことが東洋医学の分野でも実践されている。そのような考え方を否定し、それに対抗してもう一つの体制を築こうとしてきたはずの「中国」という国が、むしろ資本主義国以上に資本主義的に自国の利益を追求しようとする（ように見える）姿勢は、どこか違和感がある。しかも、それが東洋医学という分野であるだけに、東洋医学を標準化し、発展させようとする目的は、一体どこにあるのだろうかという疑問が出てくる。東洋医学が医療として患者を治すよりどころとするものは、究極には、人間の内包する力、すなわち「治癒力」である。その治癒力は確かに労働力と同じ根のものかも知れない。しかし、患者の治癒力を忘れて医者の行為のみを貨幣価値に換算しようとすることは資本主義社会では当たり前かもしれないが、医療の分野では、人間が持つ力の尊厳をないがしろにすることではないか。それは、そもそも中国が目指すことと反対の立場のものではなかったか。

人間が求めるもの、実現したいものは、無限に生まれ続ける。しかし、人間の力は自然の力の前には非常に小さなものであることを得心し、取り組み直すべきではないか。人類の歴史は、人間の営為のすばらしさと愚かさを理解し、自然の前の人間の無力さを知り、自然の恵みへ喜びと感謝を捧げる歴史であったはずだ。

人類が生み出した叡智の一つが中国医学である。それは中国文明が生みだしたが、中国という国がそれを好き勝手にしても良いというものではもはやない。それは、漢字と同じように、すでに、人類全体の財産となっている。それが世界全体の人々の恵みとなる一番良い方法を考えることが、その文明を引き継ぐ現代中国の人々の役割ではないか。中国医学を活用して、自国の利益ではなく、全世界の利益に寄与しようとする中国の姿勢が見えたならば、日本の鍼灸界は全面的に中国を支援しようとするだろう。東洋医学が、全人類の健康と福祉に役立つものと信じるからである。